

# 三島由紀夫における「京都」と「戦後」

——『金閣寺』を中心として——\*

南 相旭

## 1. はじめに一 三島由紀夫における「戦後」と京都

戦後日本文学を代表する作家の一人である三島由紀夫は、日本の「戦後」をどのように見ていたのだろうか。本稿ではこのことに、三島由紀夫の『金閣寺』における表象としての「京都」という問題から接近したい。

三島文学を代表する『金閣寺』は1956年1月から10月まで『新潮』に連載されたが、この年は日本政府による「もはや戦後ではない」という宣言がなされた年でもある。すなわち、もはや戦争の痕跡は見当たらない、戦争からと遠く離れた時空のなかに日本はあるということが日本政府の『経済白書』を通して公式的に宣言されたのである。

なるほど、1950年7月2日に僧侶林養賢の放火によって焼失した金閣寺が今日目にするような形に再建されたのも1955年であった。そしてこの年の11月15日には、いわば「55年体制」の基盤となる自由民主党が結成される。ちょうどそのころ、三島は『金閣寺』を書くために、京都や東舞鶴などを取材して回っていた<sup>1)</sup>。戦争の跡がなくなっていき、未来のための明るい兆しが見え始めていた時、なぜ三島は1950年に京都で起こった不気味な事件にこだわろうとしていたのだろうか。

こうした疑問は、一年前に書かれた、歌島を背景とし、若くて純粋な男女の恋物語である『潮騒』が大成功を収めただけに、いっそう大きくなる。というのも、同時代の政治・文化的な背景を作品世界の外に置き、美的に完璧な世界を作り上げた『潮騒』とは対照的に、『金閣寺』では戦前から占領に至る激動の歴史が物語世界のなかに入り込んでいるし、それと連動して絶対的な理念としての「美」の位相も絶え間なく脅かされているからである。このことは、三島にとって『金閣寺』を書くことは大きな転換であったことを示す。実際に、それ以後三島は日本の「戦後」を明確に射程に入れた作品を描くこととなるわけだが、こうした面からすれば、三島にとって『金閣寺』を書くことは日本の「戦後」に真っ向から向き合う出来事であったと言っても言い過ぎではあるまい。

しかし、それはなぜ京都でなければならないのか。京都は、例えば東京と大阪のような、或いは広島と長崎のような、大きな焼け跡はなかったし、占領期間中GHQが位置していた東京や、戦後から現在に至るまで島全体が基地化した沖縄のように多くの米軍が頻繁に見られるところでもない。京都は、ある意味では「もはや戦争ではない」という言葉それ自体が何の意味もなし得ない場所であるといえるのではなからうか。

しかし、だからこそ逆に、こうした京都に向かい合う『金閣寺』から、三島にとって「戦後」がどのような問題として認識されていたのかを確かめられるのではなからうか。以下、こうし

た問題意識の下、三島が京都という場をもって語ろうとする「戦後」とは何かを明らかにしていきたい。

## 2. 『金閣寺』以前の作品における「京都」

さて、三島の作品のなかで京都が物語の舞台となっているのは『金閣寺』が初めてではない。1948年4月14日に発生した京大生による女子大生殺人事件を元にして書かれた、「親切な機械」(1949年)という短編小説が先に取り上げられる<sup>2)</sup>。

この事件は、GHQの介入による教育制度の変更によって旧帝国大学である京都大学に入学することになった女子大生が、同校の男子学生によって殺害されたということで当時話題となっていた。この事件を三島は実存主義という文脈で書き直しているが、その分、のちに三島本人も「取材のため京都へ行つたけれども、作中人物の京都弁などはろくに調べもしないで書かれてをり…」と述べている通り<sup>3)</sup>、占領期の京都の雰囲気を立て的にあぶりだすことに成功したとは言いがたい。例えば1945年9月25日に京都に進駐し、ステーションホテルや京都大学楽友会館などを接収して、1952年まで約七年間占領軍として様々な制度を改革したアメリカの痕跡がこの作品にはまったく見られない。むしろ三島は、この事件発生にあたって、男女共学の導入というGHQによる制度改革という外的な要因をあえて排除する形で物語を展開している。こうした語りの戦略は当時行われた検閲を回避するためであると同時に、「光クラブ事件」を元にした『青の時代』と同じように、占領期の若者の墮落ぶりをネタとして消費するだけのジャーナリズムを批判的にとらえなおすべく同世代の若者の「内面」に焦点を合わせるためであったと思われる。

三島が占領期から京都に着目していたということは、占領期の東京を背景に同性愛の問題を取り扱った長編小説『禁色』(1953年)においても確かめられる。女性に裏切られたがゆえに、女性を愛せない青年悠一を利用し女性に対する復讐を試みようとする老作家俊輔は、ある日彼を誘って京都に向かう。そこで京都は、醍醐寺の風景に対する次のような描写を通して代理＝表象されている。

車は醍醐寺の山門をくぐつて三宝院の門前に停つた。名高い枝垂桜のある四角い前庭を、四角い整理された冬、手入れを凝らした冬が、領してゐる。この感じは、鸞鳳の二字を大書した衝立のある玄関を上がつて、庭につき出た日あたりのよい泉殿の椅子へ案内されたとき、一そう深められた。庭は本当の冬の介入の余地がないほど、統御され、抽象化され、構成され、精密に計算された人工的な冬で充たされてゐた。ひとつひとつの石のたたずまひにも、端麗な冬の形態が感じられたのである。<sup>4)</sup>

このように、冬を感じさせないほど豊かな自然を誇る醍醐寺の庭は、「本当の冬の介入の余地がないほど、統御され、抽象化され、構成され、精密に計算された人工的」なものとして表象されている。醍醐寺の庭の美しさを「人工的」なものとしてとらえるこの語りは、一見占領期の京都と何のかかわりもなく、単に三島自身の美意識がある程度反映されているかのようにみ

える。が、こうした美意識は直ちに登場する「管長」という権威者によって「日本人の芸術に対する考へ方」として拡大される。この匿名の「管長」によれば、「自然の近似値を求める精神ほど人工的な精神はない筈」であるが、こうした「極度の人工性が自然の巧みな描写のうちに、自然を裏切らうと企て」て、やがて自然は「幽閉される」という。こうした管長のことばには、醍醐寺の庭に代表される京都を「日本の美」とみなす一般の通念に対する批判が込められている。というのも、「冬の介入の余地がないほど」「人工的」な醍醐寺の庭は、例えば戦争や占領といった、日本人にとっては「冬」として経験されるはずの「自然」な感覚が、まったく介入される余地がないからである。このような「美」を、日本を代表する美ととらえてよいのだろうか。そこにあるのは「幽閉された自然」だけではあるまいか。

これらの古くて名高い庭は、いはば芸術作品といふ目にみえない不実な女体に対する肉欲の絆につながれて、その本来の殺伐な使命をわすれた男たちであり、われわれの目の前には、やむことのない憂鬱な結びつきが、その倦怠にみちた結婚生活が見えるのである。<sup>5)</sup>

ここで醍醐寺の庭は、「本来の殺伐な使命」を忘却し、女性に対する肉欲だけに熱をあげる男性として風刺されている。こうした表現は、とりあえず異性愛よりは同性愛を「自然」とする『禁色』という作品の内的論理に忠実に従っているが、それと同時に京都という名で代表される「芸術作品」(庭)に対する、一般的な日本人の考え方に対する痛烈な批判としてもとらえられる。つまりまるで日本人の美意識を代表するかのようになさされている京都の名利の庭は、実は当時「殺伐な使命」ということばで代表される政治的な情念と行動を奪われた矮小な男性の文化にすぎないのでなかろうか、ということだ。

むろん、こうした認識は、当時二六歳であった三島の仏教に対する理解がまだ浅かったことを示してくれる。『金閣寺』(1956)を経て『豊饒の海』(1970)に至った三島にとって京都の名利の「庭」は、単に目にみえる「芸術作品」としてだけではなく、死生観や歴史観を含んだ世界観と密接にかかわるようなものとなるわけだが、当時の三島は、とりあえず西洋的な視線によって京都が日本の美として表象されることを相対化することに精一杯であったとも言えよう。

しかし、だからといって、三島は京都の文化的な価値を全面的に否定したわけではあるまい。彼にとって京都は「本来」の日本の美が秘蔵されているところでもあった。『禁色』においてそれは他のところでは滅多に見ることができない男色絵であって、実はそれを見せるために老作家俊輔は悠一を連れてきたのである。ただしそれは、「ほほゑましい幼稚な肉感を湛えている」男色絵そのものではなく、それを崇高なものとして意味づける、例えば「いたいけな若君が一家臣の罪を自ら進んで着て、死にいたるまで口を緘して語らないほどの心ばへ」といった、解釈が通用する世界にほかならない<sup>6)</sup>。ちなみにこのことは、1968年に発表された「文化防衛論」において、占領期のアメリカの文化政策によって失われた、本来の日本文化として示された「みやび」の原型でもある。

占領期の三島にとって京都はとりあえず「幽閉される自然」ということばで代表される、閉鎖された人工的な空間として認識されていたが、こうした性格は京都が西洋によって美的な対象として高く評価され、戦災を免れる要因でもあった。が、そのために京都は日本文化の原型

が秘蔵されている空間であることをも、三島は見逃さなかったのである。このように若き三島にとって京都は、戦後日本文化の二重性がもっとも顕著にあらわれているところとして認識されていたのである。

しかし、占領直後の三島は、こうした京都のイメージが非常に俗な形として平面化されることに露骨な不満をあらわにする。例えば1953年4月《別冊文芸春秋》に発表された「江口初女覚書」がその代表的な例である。初子の波乱万丈な人生を通して占領期の日本の「欺瞞」をあぶりだそうとしたこの作品において、京都は戦中に女性一人で苦しい経済状況を生きる上で重要な役目を果たしている。つまり、戦前一度京都の撮影所で女優として働いていた彼女は、戦中から戦後にかけてそこで覚えた演技で人々を平気で騙して生きていくし、さらには戦後の物資不足で苦しむ京都にものを運び、「東京都内で売る三倍にちかい純益」を上げたりする。要するに、この作品において初子は京都をある種の文化資本として活かしているのである。

むろん、戦後直後にこうした彼女の「虚偽」が通用するのは、あくまでも日本の事情をよく知らないアメリカ軍の存在があってこそ可能であった。アメリカ軍によって京都が日本文化を代表する特権的な記号として浮かび上がる一方で、近代以来文化的な権威の象徴であった華族の位相は著しく衰えていく。三島の作品世界において初子は、こうした変化を象徴的に浮き彫りにする存在であったといえる。

これまで見たように、三島は敗戦直後から日本において京都が戦後日本においてある種の重要な価値を担う背負うことになっていくのを注意深く追跡していたし、こうした問題意識は、やがて『金閣寺』において集約される。

### 3. 『金閣寺』における「京都」と「戦後日本」

#### ① 外部の視線から眺められる「京都」の物語

『金閣寺』は京都が主な舞台であるにもかかわらず、これまでの先行研究ではその意味が案外議論されていない。だが京都に焦点を合わせて『金閣寺』を読みかえすと、これまでの三島作品と違って、『金閣寺』における京都は決して「戦争」と無縁ではないところとして描かれていることが目をひく。

このことは、何よりも主人公である「私」が京都市生まれではないということとかわっている。舞鶴の成生岬の寺の子として生まれ、東舞鶴中学校に通っていた「私」は、軍港舞鶴にただよう戦争の雰囲気馴染んでいた。例えば彼は母校に遊びにきていた舞鶴海軍機関学校の生徒から「あと何年かで、俺も貴様の厄介になる」といわれたことがあるし、戦争から逃れようとする海軍の脱走兵と彼をかくまってくれた舞鶴海軍病院の篤志看護婦の悲劇的な恋も知っていた。こうした「私」の生まれ育った環境は、いざ京都の鹿苑寺の僧侶になっても、依然として京都をその外部の視線から眺めることを可能にしてくれる大きな要因である。

実際に「私」が早くから自分を京都とその外部を繋ぐ媒体として自己規定しようとしていたことは、父に連れられて初めて鹿苑寺を訪れるために舞鶴線に乗った時の、次のようなところから確かめられる。

私は窓外のどんよりした春の曇り空を見た。父の国民服の胸にかけられた袈裟を見、血色のよい若い下士官たちの金釦をはね上げてみるやうな胸を見た。私はその中間にみるやうな気がした。やがて丁年に達すれば、私も兵隊にとられる。しかし、私はたとへ兵隊になつても、目の前の下士官のやうに、役割に忠実に生きることができるかどうか。ともかく、私は二つの世界に股をかけてゐる。私はまだこんなに若いのに、醜い頑固なおでこの下で、父の司つてゐる死の世界と、若者たちの生の世界とが、戦争を媒介として、結ばれつつあるのを感じていた。私はその結び目になるだらう。<sup>7)</sup>

ここは下士官や水兵など、主に「海軍に関係のある人」で混雑する舞鶴線列車のなかで「私」が、普段別々の領域にいたと思われた「父の司つてゐる死の世界」と「若者たちの生の世界」とが、「戦争」を媒介として確実に結ばれようとしていることに気づく場面であるが、これを通して三島は、一見戦争と何のかかわりももたないかのように思われがちな京都も、実は舞鶴線で軍港舞鶴とつながっていたことをはっきり示す。その上さらに物語において「私」の存在を、両者の「結び目」として位置づけようとすることによって、『金閣寺』における京都は、絶え間なく、その外部とのかかわりのなかで眺められ、語られることを強いられる。

その外部は舞鶴だけに限らない。戦中の京都の日常は、米軍のサイパン上陸と陥落、東京や大阪の空襲のような京都以外の日本の重要地域は勿論、連合軍のノルマンディー上陸のような世界史的な出来事とのかかわりのなかで語られる。このことは、まず物語展開において「私」と金閣寺とのかかわりを一層深める要因となる。つまり「金閣ほど美しいものは地上にない」という父のことばとは裏腹に、「私」の目にはそう美しく見えなかった金閣は、戦争が激化するという情報に接し、「このまま行けば、金閣が灰になることは確実なのだ」と信じることによって、美しい存在へと変貌する。「私」にとって「戦争」は、自分と「私を拒絶し、私を疎外してゐるやに思はれた」美的存在としての金閣との間に、「橋」を懸ける存在にほかならなかつたのである。

要するに、もしわれわれが金閣寺が日本の美的表象としての京都を、「私」がそこから疎外されていた地域を各々代理＝表象するとみなすことができるならば、『金閣寺』は「戦争」を媒体として京都とその外部を繋げようとする物語として読むことができる。言い換えれば『金閣寺』は、敗戦直後戦争ともっとも離れたところにあつたとみなされがちな京都における「戦争」の記憶を送還することによって、逆にそれを取り消そうとする「戦後」を問い直そうとする物語としてとらえられる。

実際に京都は戦争が終わるまで大きな空襲を受けず、終戦を迎えた。しかし、だからといって、京都が戦争と全く無縁であつたとは言えない。三島もそれを承知した上で、次のように語る。

終戦の詔勅をきいてから、東京なら宮城前へゆくところであらうが、誰も居ない京都御所前へ泣きに行つた者が大ぜいゐる。京都には、かういふ時に泣きに行くための神社仏閣が沢山ある。どこもその日は繁昌したにちがひない。しかしさすがに金閣寺へ来る者はなかつた。

灼けた砂利の上には、かくて私だけの影があつた。金閣がむかうに居り、私がちらに居たと云ふべきだらう。この日の金閣を一目見たときから、私は「私たち」の関係がすで

に変つてゐるのを感じた。

敗戦の衝撃、民族的悲哀などといふものから、金閣は超絶してゐた。もしくは超絶を装つてゐた。きのふまでの金閣はかうではなかった。たうとう空襲に焼かれなかつたこと、今日からのちはもうその惧れないこと、このことが金閣をして、再び「昔から自分はこのに居り、未来永劫ここに居るだらう」といふ表情を、取戻させたのにちがひない。<sup>8)</sup>

今日、1945年8月15日に東京の皇居前に大勢の人々が集まって泣いたということは正確な事実ではないとみなされているとはいえ、東京や京都のみならず、日本全国で敗戦で泣いた人々は少なからず存在していたはずだ。明治時代に入る前まで天皇の御所であった京都であるだけに、敗戦の衝撃は一層深かったと言つても不思議ではあるまい。

とはいえ、敗戦の日に「私」が鹿苑寺で確認したのは、誰も訪れずしんとした情景にほかならない。さすがに禅宗系列の鹿苑寺は、「かういふ時に泣きに行く」ような場所ではなかった。そこで「私」は、金閣は天皇の名のもとでおこなわれた戦争に負けたという「民族的悲哀」を「超絶」していることに気づき、「私たち」の関係がすでに變つていることに気づく。こうした「私」の心境の変化は、これまで「私」が自分と金閣とのかかわりを天皇を中心とする「帝国日本」という文脈のなかでとらえ、そうすることによってのみそれを「美」的な存在としてみなすことができたことを事後的に示してくれるのだ。しかし敗戦は、金閣とそれに代表される京都がこうした「私」の信念体系の外にあることを一気にみせつける。こうして『金閣寺』において敗戦は、京都の外部からきた者が、戦争を通して辛うじて得ようとしたそれと自分との共同性を、再び失わせる出来事として記憶されることとなる。

戦争中に「京都」を媒介とし「日本人」としてのアイデンティティを構築したものの、敗戦によってそれが崩れ去った「私」のような認識は、例えば戦争イデオロギーに介入した京都学派を顧慮すれば、ある種のリアリティーを感じさせなくもない。それだけに『金閣寺』はまったく新しい「記憶」とは言えないかも知れない。それにしてもこうした京都のありようを戦後日本の舞台に前景化させるにとどまらず、さらに「戦後日本」につなげようとする三島の行為は、やはり注目されるべきであると言わざるを得ない。

## ② アメリカが介入する「京都」から「戦後日本」を考える

では、『金閣寺』において占領期の京都はどう描かれているのだろうか。前に取り上げた『禁色』に比べて顕著な著しい特徴はやはりアメリカの存在である。

拙著『三島由紀夫における「アメリカ」』ですでに述べた通り<sup>9)</sup>、『金閣寺』において、「私」にとってアメリカはまず、「俗世のみだらな風俗」をもたらした、無礼な観光客の姿としてあらわれる。つまり彼らは、「片言の英語の案内に狩り出された」「私」の僧衣の袖を「無遠慮に引張つて、笑つたり」し、或いは「いくばくの金を差し出し、記念写真をとらせるために、僧衣を貸してくれ、と言つたり」する存在である。

確かに敗戦直後京都に進駐するやいなや、米軍は京都観光に出たことが『京都新聞』で確かめられる。1945年9月25日に京都に入ってきた進駐軍は、都ホテルや京都ホテル、旧軍施設など、主な施設を接収した後、さっそく『京都新聞』に登場することになる。東京や沖縄、福岡

などで占領軍としてのイメージをできるかがり隠そうとする一方で、京都ではメディアを通して自らを積極的に語ることを少しも憚らない。アメリカのこうした両面的なメディア戦略は、「戦後史」においてアメリカによる被害の記憶が破片化ないし周縁化される大きな要因となるだけでなく、京都の表象にも大きな影響を与える。

例えば9月27日付の『京都新聞』には、「なぜ京都を爆撃しなかったか」という見出しのもとで、デッカー少将のインタビューが載っているが、そこで彼はその理由を「京都は神社、仏閣を始め学校、図書館、美術館、博物館その他の名所史蹟が多く、この中に我々の文化的にも相当の参考資料になるものもある。つまり京都の施設は殆どが非戦闘的なもので取り立てて爆撃目標にするものはなかつたと自分は思ふ」と述べている。京都に残された文化を一括して「非戦闘的なもの」としてみなす彼の見方が必ずしも正しいとは言えないものの、こうした発言によってまず彼はアメリカを日本の文化や歴史を理解する存在として表象するばかりではなく、京都を帝国日本のイデオロギーから切り離し得る、戦後日本において特権的な場として表象しているのだ。それ以外にも『京都新聞』においては、京都の文化を一方向的にほめる、観光客としての進駐軍たちの「声」が反復的に載せられるが、これによって「(京都=文化) = 平和」という認識を拡散させていったということが予測できる。

こうした進駐軍の「声」は、戦後の京都が国際的な観光都市を志向する際にも大きな役割を果たす。1945年11月10日付の『京都新聞』には、進駐軍将校の一人であったラグルス大佐が京都を離れる際に、「京都は美しい色彩のある魅力のある都」であり、「戦争によって傷つけられなかった只一つの大都会である」から、「日本を見んとする所の観光客をひきつける」という趣旨のメールを同新聞社宛に送ってきたとある。観光資源として京都の可能性を高く評価する彼の発言は当時物資不足で悩んでいた京都市にとっては歓迎すべきものだったに違いない。実際に京都市は戦争中には中断されていた祇園祭を早くも一九四七年に再開する形で本格的に「文化観光都市」を目指す。占領期において日本政府が宗教行事を支援することは占領当局によって禁止されていたが、京都の観光局長は進駐軍に対し祇園祭を「宗教行事ではなく古文化財の年に一度のデモンストレーションだ」と説明して納得させたという<sup>10)</sup>。たとえ宗教の性格を薄くしても観光客たちの文化に対する接近性を高めたいということは、戦後物資不足で苦しんでいた京都市が選ぶべき道としては決して悪いとはいえないものの、ある固有の文化に対する見方に変化を与えることとなった。要するに、ある文化の意味が、他者の観光対象という側面から問われることとなったのである。

実際に京都国際文化観光都市建設法が国会で可決されたのは、金閣寺が消失した直後である1950年7月末だったが、1950年7月8日付の『京都新聞』の「社説」はこの法案の目的を次の二つの側面から説明している。つまり、「日本文化の象徴であり、爆撃の目標からとくに除外された世界平和の生きた記念館」である京都を、第一に「世界平和に貢献するためその観光資源を開発保存」すること、第二に「民主政治」確立のための「地方自治確立」を実現する場とする、この二つである。一方、こうした内容の「社説」以外には、『京都新聞』の一面のほぼ大部分は、朝鮮戦争の緊迫した情勢にまつわる記事が占めているが、このこと自体がいわゆる「戦後史」の一側面をもっとも端的に象徴しているともいえる。要するに、朝鮮半島では激しい戦争が起こっているにもかかわらず、京都に残された文化遺産が「観光産業」のための「資源」となり、

それがやがて世界平和にもつながるといふ素朴なナラティブが、何の疑いもなく展開されているのである。ここに、一方では朝鮮半島では戦争を続け、他方では京都の文化遺産を素直に楽しむであろうアメリカの二重性を、そのまま自らの生の条件として受け入れる戦後日本人の姿を垣間見ることができるのではなかろうか。

『金閣寺』において三島は、こうした戦後日本の矛盾を、京都の変化を通して語ろうとするのだ。まず京都の「文化観光都市」への志向は、一般の人々が鹿苑寺を宗教的な寺院から観光収入源として見なすことに影響を与える。

きくともなく私はきいた。彼らの会話にたびたび金閣寺や銀閣寺の名のでるのを。

金閣寺や銀閣寺には、うんと寄附をさせなければならぬといふのが、彼らの一致した意見だった。収入は銀閣のほうが金閣の半分ほどであるが、それでも莫大な金額である。一例が金閣の年間収入は500万円以上と思はれるが、寺の生活は禅家の常で、電気代と水道代を入れても、1年に20万円の余しかかからない。貯つた金をどうするかといふと、小僧たちには冷飯を食はせておいて、和尚一人が毎晩祇園へ出かけて使つてゐる。それで税金もかからないのだから、治外法権も同じである。ああいふところからは、容赦なく寄附を要求せねばならぬ。と交々言った。<sup>11)</sup>

この場面は、鹿苑寺の住職から後継にする気がなくなったことを告げられた「私」が、絶望し故郷舞鶴に一時帰るために乗った列車で聞いた乗客たちの対話内容であるが、ここで「どこかの公共団体の年とった役人」は、鹿苑寺の得る「莫大な金額」の収入は禅宗の寺院としては何の役にも立たないどころか、宗教人の墮落をもたらすだけだから、公共団体に寄附する方がよいと主張する。とりわけ宗教の自由を保障する新しい憲法は、国家の宗教団体に対する強制的な介入を許さないが故に、鹿苑寺のような寺院は一種の新しい「治外法権」として特権化されるのではあるまいかという指摘は、日本の戦後史における宗教の閉鎖性という問題と、それを許す日本国憲法の問題点を浮き彫りにしている。

ただし『金閣寺』における寺院をめぐる環境の変化は、何よりも僧侶としての「私」のアイデンティティの問題に直結する。ただそれは自分たちは「冷飯を喰べ」、和尚だけが祇園に通っているという僧侶間の不平等に起因するわけではあるまい。戦前に同じ舞鶴線の列車のなかで「父の司つてゐる死の世界」と「若者たちの生の世界」のあいだの「結び目」として自己規定していた「私」は、もはや自分が「老役人たちのかうした理解の仕方」でしか理解されないことに対し、「云はん方ない嫌悪」を感じるようになるのだ。そこで「私」は、「理解されないというふこと」を、新しい自分の存在理由とする。つまりそれは、金閣を守り、案内するという、社会から求められる役目に逆らい、それを燃やして破壊することである。

むろん、「私」がこのように社会から理解されえない行為に出た動機は、戦後の寺院をめぐる環境の変化だけでは説明されない。それは、鹿苑寺の住職になるという両親の希望が頓挫されることに対する個人的な復讐や、碧巖録の「南泉斬猫」や臨救録の示衆の章にある「仏に逢つては仏を殺し、祖に逢つて祖を殺し…」に代表される濟禅宗の難題を自分なりの方法で解消する行為としても説明される。とはいえ、三島は、「私」がそれを決意する過程において、アメリ

カの介入の跡を強引に挟んでいくことを見逃すわけにはいかない。それは観光客としての米軍だけでなく、日本人女性に暴力を加える米軍兵の登場においていっそう明らかである。

「戦後最初の冬」のある日、「泥酔してゐる米兵」は、「真赤な炎いろの外套を着」た、「外人兵相手の娼婦」を連れて、鹿苑寺を訪れる。「英語となると吃らな」い「私」は、彼らを金閣に案内することになるが、その際、彼は米兵の命令にしたがって雪の上に倒れている娼婦の腹を踏むこととなる。そしてこれが原因となり、彼女は流産する。このようなアメリカ軍の姿は、「日本文化」を愛する観光客として米軍が頻繁に登場する『京都新聞』においては決して見られないがゆえに、『金閣寺』におけるこうしたアメリカ兵による日本人女性への残酷な暴力は、非常に「非現実」的に見えるかもしれない。

しかしそれはアメリカ兵があまりにも残酷な暴力を振っていたからではない。当時の多くの日本人はアメリカ兵が恐ろしい暴力を振る可能性を十分に想定していた。だからこそ、慰安施設を設けた上で、赤線の向こうにその暴力を押し込もうとしたのである。西川祐子によれば、ミズーリ号艦上での降伏文書調印の一週間後である1945年9月9日付『京都新聞』では、京都府が「進駐軍将兵を対象とするキャバレー式のダンスホール」を初めとする慰安施設を、都ホテル、東山ダンスホールや華頂会館にも設置するという方針を決めたし、また「これとは別に祇園乙部、宮川道、七条新地、島原、中書島が進駐軍の慰安所として指定」したことが報じられたという<sup>12)</sup>。『金閣寺』における鹿苑寺のなかで行われる暴力に、ある種の違和感を感じずにはいられないのはこのこととかかわっている。つまりそれは、日本人女性に対するアメリカ兵の暴力は「決められた場所」でなされるべきであると思ひ込んでいたためにすぎない。だがよく考えてみると、そのような保障はどこにもなかったし、決められた場所における暴力なら許されるかのような考え方にも問題がある。とすると、『金閣寺』における暴力の場面は、単に非現実的なものではなく、占領期に不可視的なところであればどこにでもあり得たものを問題化しているものと見るべきではなからうか。つまり赤線の向こうでしばしばあったはずの暴力を、そこともっとも距離のあると思われる場所へと強引に引っ張り出し、あえて見せることによって、周辺化されていた被害の経験を一気に日本人全体の経験として記憶しようとしたのである。

こうした三島の行為は、いわば1955年以降「占領」の被害を事後的に語ることによって「被害者意識」の拡散に寄与した当時の日本文学の流れにしたがっているかのように見えるかもしれない。しかし三島は、その暴力が見えにくかったのには、アメリカ側と日本人男性の共謀があったことをもはっきり示している。テキストにおいてアメリカ兵の暴力は、彼の命令に従って「私」によって行われたし、「私」はその行為の代償としてタバコをもらい、それを住職に渡す。ことはそれで終わらず、被害を受けて流産した女性が後に鹿苑寺を訪れ、住職から金をもらって帰るという出来事につながる。要するに、戦後米軍を金閣寺に案内するようになった「私」は、その過程で米軍によって「暴力」へと誘導され、加害者側に回され、さらにそこに寺院の住職を巻き込ませることとなるわけである。それを忘れられない「私」と、水に流そうとする住職とのあいだにできた亀裂は、両者のあいだに信頼が崩れ始める切っ掛けとなり、やがて金閣を燃やす「私」の動機の一つともなるのだ。

『金閣寺』における「アメリカ」は、最終的に戦後舞鶴を訪れた「私」の目に映った、「米国兵」によって「外国の港市」となってしまった舞鶴港の風景においても確かめられる。拙著です

に指摘した通り、当時の舞鶴港ではすでに米軍の痕跡は薄くなっていたにもかかわらず、『金閣寺』において三島は、あえて「私」の故郷が「ひろい軍用道路」を行き来する米軍兵によって、まるで「行き届きすぎた衛生管理」を受けるかのような形で占領されたと語っている。その結果、「私」は舞鶴港が「かつての軍港の雑然とした肉体的な活力を奪われ」、「病院のやうに」なってしまったという絶望感に陥ってしまう。こうした感情は、もはやアメリカの管理が京都だけではなく、その外部にも広がっていったことに起因する。三島は、このように日本を管理するアメリカの存在を喚起することによって、「私」にとって金閣を破壊することが、まるで管理システムとしての「アメリカ」から逃れ、「生まれたままの姿」に戻る道でもあるかのような幻想を合理化させるのである。

要するに、『金閣寺』を通して三島は、金閣焼失を一僧侶による「非行」ではなく、アメリカの京都への介入が最終的にたどり着くべき地点として提示しようとしたということである。言い換えるならば、三島は、金閣（或いは京都）を燃やすことがアメリカと日本人との相互作用によって作られた「文化国家」としての「日本」の欺瞞性を剥ぎ取る（或いはそれに対抗する）、唯一の方法であるかのように考えたのかもしれない。

#### 四. 『金閣寺』の限界と三島の「〈新〉植民地主義」

ある文化の価値が、支配する側によって見出される、或いは再認識されるのは、占領期の京都においてのみ行われたことではあるまい。現在の韓国における文化遺産のなかでも、植民地時代の日本人によってその価値が見出されたものは少なくない。しかし、だからといって、支配による被害が正当化されるわけではあるまい。現地の文化に対する配慮も実は暴力を隠す手段になりかねないという三島の認識は、近代に植民地化された経験をもつ地域の人々も深く共感できるものだと思う。

しかし、『金閣寺』において三島は、戦後日本とアメリカとのかわりだけを強調するあまり、戦後日本を東アジアとのかわりのなかで見直すことはできなかった。例えば『金閣寺』において舞鶴は、先に述べた通り敗戦によってしばらくのあいだアメリカの軍港へと変貌したが、その後は朝鮮半島や中国、シベリアから帰ってくる人たちの引揚港となったのだった。1947年8月20日にシベリアから舞鶴港に引き揚げてきた小熊英二の父小熊謙二の証言によれば、「舞鶴の湾内には、戦争で沈没した何隻かの船が、マストや舳先だけを海上に出して、みじめな姿をさらしていた」という<sup>13)</sup>。帝国日本の残骸を、帝国日本の「棄民」としての引揚者が眺める<sup>14)</sup>、このような舞鶴の風景は、残念ながら『金閣寺』における舞鶴の場面では見られない。

とりわけ舞鶴は、1945年以来、朝鮮半島の政治的な混乱を避けて逃げてきた朝鮮人が入ってくる関門でもあった。そして彼らの一部はやがて京都の西陣に定着していく。戦争に疲れた在日朝鮮人が京都の一角に住みかを求めたことには、立命館大学や京都大学の存在も大きかったとされている<sup>15)</sup>。このように戦後日本において京都は、東アジアからやってきた人々の受け皿でもあったにもかかわらず、三島のみならず、水上勉も、これに関しては全く触れていない。京都の風景における「在日」の不在は、いわゆる「戦後史」の代案としての「戦後文学」もやはり、国民国家という枠組みをなかなか超えられなかったということを示すのではなからうか。

戦後の京都を如何に表象するかということは、日本文学における「戦後」の問題において非常に重要なのである。

三島は京都に焦点を合わせることによって、アメリカの傘下で「文化国家」として安定する「戦後」を浮き彫りにしているものの、東アジアとのかかわりで浮かびあがる「戦後」には目を向けることはなかった。例えば晩年の考え方がよく現れている「文化防衛論」(1968年)において三島は、戦後の文化主義に対し鋭く批判しながらも、在日朝鮮人問題を、「国際問題でありリフュジーの問題であっても、日本国民内部の問題ではありえない」と言って斥けている<sup>16)</sup>。また同論文において三島は、沖縄の問題に対しても「人質にされた日本人」というイメージを拡散させるだけであるという理由で、中国の文化大革命に対しても「目に見える一切の文化を破壊する『逆の文化主義』『裏返しの文化主義』」であるという理由で激しく批判した。こうした三島が最終的にたどり着いた「日本」とは、周知のように「天皇」であった。では、このことをどう理解すればよいのだろうか。

例えば酒井直樹は、「植民地化されていると同時に植民化をしている国民であり、植民地主義に対して同時に被害者であり加害者である」という矛盾を抱えている戦後日本(「アジア太平洋戦争で敗北した後の日本」)のありようを、西川長夫の晩年の学問的な関心であった「〈新〉植民地主義」ということばで表現しているが<sup>17)</sup>、日本における「アメリカ」の影を強く意識していた三島も一応このことをはっきり認識していた。しかしその矛盾を解決する方法として三島は、西川や酒井とはまるで正反対の選択をしていた。西川や酒井が、その矛盾を解消するためにアメリカからは距離をおき、被害者としてのアジアの方に手を差し伸べようとしているのに対し、三島はアメリカによる日本占領の跡としての京都の「いま・ここ」を批判しつつも、まさしくアメリカの強い意志で生かされた天皇という価値に対する愛着を棄てることができなかったのである。

要するに「被害者であり加害者である」という矛盾に、西川と酒井が被害者の立場から接近しようとするのに対し、三島はそれを強く拒否したのである。三島は被害者意識を乗り越えるためにはとりあえず日本が強くなるしかないと思ったし、そのために「強い天皇」を求めた。それが「文化概念としての天皇」である。普通の人間にとっては、とうてい許せない「暴力」に対しても「許し」ができる唯一の存在としての天皇か、或いは敗戦の責任を自ら取る天皇。だが、そのような存在としての天皇は『古事記』のような神話のなかでしか存在しないことをも、三島はよく知っていた。だからこそ、人間である天皇を神につくりなおすための「決起」がどうしても必要だったのである。三島にとってこのことは、戦後日本において定着されつつあった「文化=平和」という「誤った」認識を、「文化=暴力」へと「正し直す」ための唯一の方法でもあったのである。三島にとって「戦後」は、「文化」認識をめぐる熾烈に対立する空間であったのである。そのためにまず、新しく復元された金閣寺(ないし京都)に代表される、戦後の「日本文化」を否定しなければならなかった。

しかし、金閣を燃やすことで果たしてアメリカの影響下から逃れられるのだろうか。それは一応アメリカの占領という屈辱的な痕跡を取り消そうとする行為のようにみえるかもしれないが、実は戦後日本のアメリカ化(「〈新〉植民地主義」)がもたらした「歪み」の典型を体現しているといえなくもない。つまり、初めから戦争をしなかったらずっと持続可能だったはずの金

閣を、あえてアメリカによって持続可能であるものと思ひ込み、こうした屈辱の象徴としての金閣を燃やしてやっと「生きようと」する「私」の行為は、決してアメリカから自由になれることに繋がらず、単に自己破壊に終わるからである。このことは、ボディ・ビルによって逞しく鍛えられた、まさしくアメリカ化された自分の身体を、もっとも暴力的な方法で傷付けて亡くなった三島の最期にも当てはまる。「戦後」を、「あのような過ちを二度と繰り返さない」という信念を共有する価値体系の空間であると定義できるならば、金閣焼失と三島の切腹こそ、戦後史において忘れてはいけない出来事の一つとして記憶しなければならない。〈\*〉

## 注

\* This work was supported by the Incheon National University (International Cooperative) Research Grant in 2015, and also by Ritsumeikan University Research Grant in 2015.

- 1) 佐藤秀明・井上隆史(編)「年譜」『決定版三島由紀夫全集』第四二巻, 新潮社, 2005年,
- 2) 「親切な機械」『風雪』1949年11月号。
- 3) 「あとがき」『三島由紀夫短編全集3』, 講談社, 1965年。→『決定版三島由紀夫全集』第17巻, 新潮社, 2002年, 789頁。
- 4) 『決定版三島由紀夫全集』第3巻, 新潮社, 2001年, 252頁。
- 5) 『決定版三島由紀夫全集』第3巻, 新潮社, 2001年, 253頁。
- 6) 同書, 254頁
- 7) 『決定版三島由紀夫全集』第6巻, 新潮社, 2001年, 29頁。
- 8) 『決定版三島由紀夫全集』第6巻, 新潮社, 2001年, 70～1頁。
- 9) 南相旭『三島由紀夫における「アメリカ」』彩流社, 2014
- 10) 観光四〇年の回想刊行委員会編『聞き書 観光四〇年の回想』54～56頁。但し、ここでの引用は京都市市政史編さん委員会(編)『京都市政史』(京都市, 2009年, 674頁)による。
- 11) 『決定版三島由紀夫全集』第6巻, 新潮社, 2001年, 196頁。
- 12) 西川祐子「古都の占領—占領期研究序論」『アリーナ』第10号(中部大学, 2010年12月), 158頁。
- 13) 小熊英二『生きて帰ってきた男』(岩波書店, 2013年), 173頁。
- 14) 杉浦清文「引揚者たちのわりきれない歴史—植民地主義の複雑さに向き合う」, 『戦後史再考』, 94頁。
- 15) 尹健次『「在日」の精神史1—渡日・開放・分断の記憶』(岩波書店, 2015年) 194～200頁。
- 16) 三島由紀夫『全集』第35巻, 37頁。
- 17) 酒井直樹「ボックス・アメリカナの終焉とひきこもりの国民主義—西川長夫の〈新〉植民地主義論をめぐって—」『思想』(岩波書店, 2015年7月号), 24頁。